

『スーダン遺跡紹介』 第2回

メロエ南墓地(Meroe South Cemetery)

坂本麻紀(アラブ調査室研究員)

はじめに

スーダン遺跡紹介の2回目は、前回に引き続き、2011年にユネスコ世界遺産に登録された「Archaeological Sites of the Island of Meroe」から、メロエ南墓地(Meroe South Cemetery)を紹介する。

メロエ南墓地は、前回紹介した北墓地(North Cemetery)の向かいに位置する遺跡である。北墓地と南墓地は、幅約 200m の巨大なワディ(涸れ谷)を挟んで向かい合っており、南墓地では緩やかな丘陵上に 10 基ほどのピラミッドを見ることができる。この2つの遺跡から西へ 3km ほどの距離に西墓地(Meroe West Cemetery)という遺跡があり、北墓地、南墓地と合わせ、この3つがメロエを代表する墓地遺跡となっている。

南墓地と西墓地は、ヌビア人がエジプトを支配した「古代エジプト第 25 王朝(722-655 BCE)」の礎を築いたクシュ王ピアンキ(Piankhy, 753-722 BCE)の時期から墓の造営が始まったと考えられている。本来であれば、それほど距離が離れていない場所で同時期に存在する2つの遺跡を一緒に紹介すべきであるが、準備の都合上、西墓地については次回に廻すこととしたい。

今回は発掘報告書の墓データを交えながら、地上に現存するピラミッドだけでなく、現在は見ることができない地下に眠る墓などについても触れ、この遺跡の魅力を紹介したい。

尚、写真は全て筆者が撮影したものであるが、図版等は適宜、引用元を示す。



図1 Meroe South Cemetery (北西より遺跡を臨む)

1. 遺跡を知るための事前知識

①発掘調査

1916 年から 1923 年にかけて、エジプト学の父とも言われる G.A.ライスナー (Reisner) 率いるハーバード大学・ボストン美術館合同調査隊は、ナパタ期 (Napatan Period, 1000-300BCE) とメロエ期 (Meroitic period, BCE300-350CE) のクシュ王国の王墓地6遺跡の発掘調査を行った。王墓地はナイル川第4急湍のナパタ地域と、ナイル川第5急湍と第6急湍の間に位置するメロエ地域に分かれており、ナパタ地域では、クッル (El-Kurru)、ヌリ (Nuri)、バルカル (Gebel Barkal or Jebel Barkal) の3つの王墓地、メロエ地域では、現在の町ベグラウィヤ (Begrawiya) にある北墓地、南墓地、西墓地¹の3つの王墓地が対象となった²。これらの発掘調査報告書は「The Royal Cemeteries of Kush」(R.C.K.) シリーズとして5巻にまとめられている³。

ライスナーは墓の番号を付ける際、遺跡の略語 (Ku、Nu、Bar) と番号を組み合わせている。メロエ場合、3つの墓地がある町ベグラウィヤの略語「Beg.」とそれぞれの墓地の頭文字をとり、メロエ北墓地を「Beg.N.」、南墓地を「Beg.S.」、西墓地を「Beg.W.」とした。遺跡紹介で出てくる墓に番号がある場合、このようなルールであることを覚えておくと、どここの遺跡の墓か理解しやすいだろう。

②ナパタとメロエ

ナイル川第4急湍の少し下流に、聖なる山ジェベル・バルカルがある。ジェベル・バルカルはヌビアのアメン神⁴が住む山として崇拝され、紀元前 722 年にエジプトの第 25 王朝を樹立したクシュ王たちは、このジェベル・バルカルの麓に複数の神殿や王宮を建設し、この地でヌビアとエジプトの統治を行った。その第 25 王朝の礎を築いたクシュ王ピアンキの時期には、ジェベル・バルカルから直線距離で 250km 以上離れたメロエの南墓地と西墓地で、墓の造営が始まったと考えられている。これら2つの墓地の第 25 王朝の時期に属する墓からは、クシュ王たちと関連する副葬品などが出土しており、クシュ王国の支配領域が広範囲に及んでいたことが分かる⁵。

紀元前 300 年頃に王都がジェベル・バルカルのあるナパタからメロエへ移るが、ジェベル・バルカルの麓の神殿群は、その後も修復や拡張が続けられた。またメロエ期にはジェベル・バルカルのアメン神殿 (B500) の横に大規模な王宮 (B1500) が建造され、山のそばに複数のピラミッドが築かれるなど、ジェベル・バルカルはヌビア人にとって神聖な場所であり続けたと考えられる。



図2 聖なる山ジェベル・バルカルと
アメン神殿 B500

2、遺跡の規模(広がり)と墓の年代

南墓地を地図で確認すると、220m×220m ほどの範囲に、大きく3つの墓群が丘陵上に広がっていることが分かる。西側には土坑墓(pit grave)を中心とした墓群、中央にはピラミッドやマスタバ⁶(Mastaba)など上部構造を持つ墓が南北に並び、そして東側にはピラミッドが北東から南西に並んでいる。また、これらの墓群から 125m ほど西に離れた場所に1基だけピラミッドが築かれている。現在、南墓地で実際に見学できる墓は東側のピラミッド群である。

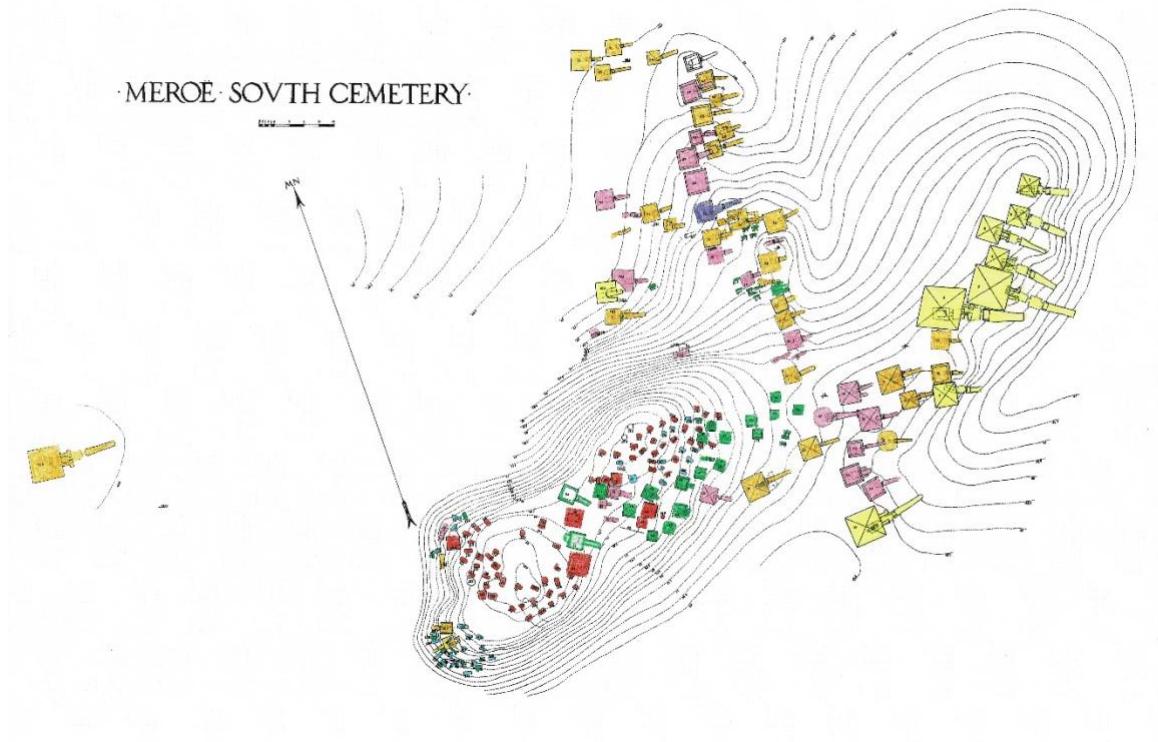


図3 メロエ南墓地遺跡全体図(Dunham 1963 を元に筆者が年代ごとに色分け)

発掘報告書 R.C.K. Vol.5: The West and South Cemeteries at Meroe によれば、南墓地はナパタ初期からメロエ初期(753-C. 275 BCE)まで 500 年ほど利用されたと考えられている。発掘された墓の数は 224 基であるが⁷、墓として使われていないものや年代が分からないものを除くと、216 基が分析の対象となる。これらの墓がどのような墓域を形成しているのか、年代を区切りながら墓の分布状況を見て行きたい。

尚、この発掘報告書では墓の年代が細かく設定されているが、ヌビアの年代に関しては、第 25 王朝の時期や一部を除き、年代を決定できる資料がほとんどないため、相対年代を用いるのが一般的である。そのため、今回、墓の年代に関しては、クシュ王ピアンキと第 25 王朝の年代(753-655 BCE)以外は、相対年代を用いた⁸。

発掘報告書で 216 基の墓データの年代を確認したところ、206 基がナパタ期に属するものであ

った。残りの 10 基については、ナパタからメロエへ移行する時期の墓が1基と、メロエ初期の墓が9基であった。メロエ初期の墓については、西側に1つだけ離れている墓以外は、2人の王とその王妃たちのピラミッドとされており、南墓地が **Royal Cemetery** と呼ばれているのは、これらの墓に由来するものであることが分かる。

南墓地の墓の 95%がナパタ期に属するため、表1のようにナパタ期を①から⑤に分け、それぞれの年代の特徴や墓の数、色分けを行った。図3はこれらの情報を基に、年代ごとに墓の分布状況が分かるよう色で示したものである。

地図色分け	墓の年代	各年代の特徴など	墓の数
赤色	ナパタ期①：紀元前753-655年	クシュ王ピアンキと第25王朝の時期。計5人の王の統治期間。	71
青色	ナパタ期②：紀元前7世紀後半	第25王朝が終了した直後の時期。計2人の王の統治期間。	31
緑色	ナパタ期③：紀元前7世紀末-575年頃	計3人の王の統治期間。	45
ピンク	ナパタ期④：紀元前6世紀前半-5世紀中頃	計8人の王の統治期間。	26
オレンジ	ナパタ期⑤：紀元前5世紀後半-330年頃	計8人の王の統治期間。	33
紫色	移行期：紀元前330-275年頃	ナパタ期からメロエ期へ移行する時期。計5人の王の統治期間。	1
黄色	メロエ初期：紀元前275年頃	メロエ初期の王2人の統治期間。この後、北墓地に王墓は移転する。	9

表1 南墓地の墓の年代と数

図3の地図では色分けが少々分かりにくいですが、ナパタ期①の第 25 王朝の時期には、遺跡の南西の丘陵上に墓が密集して築かれていることが分かる。また、25 王朝終了後のナパタ期②と③の時期にも、①の墓に近接して墓が築かれているが、同じ丘陵上にそれぞれの年代でいくつかのまとまりも見られる。また、ナパタ期③では上部構造を持つ墓が多く見られ、丘陵上の軸線もほぼ同じに見える。ナパタ期①～③の時期は南西の丘陵上に墓が造営されていることが特徴として挙げられる。ナパタ期④と⑤では、遺跡のちょうど中央部分に南北に上部構造を持つ墓が並んで築かれ、ほとんどの墓の軸線が東西で揃っていることが特徴といえる。同じナパタ期でも墓の造営期間が 400 年以上と長期にわたっていることもあり、①～③と④⑤では墓の造営場所や、上部構造の有無、軸線などが異なり非常に興味深い。

また、ナパタ期④の墓で1つだけ 125m ほど西に離れたピラミッドがある。この墓 (Beg.S.503) は埋葬室にエジプト風の壁画が描かれ、その天井部分に残されていた名前から Kennuwa という王妃のものと考えられていた⁹。従来、この王妃の墓は、紀元前 270 年頃にメロエで最初に王墓を築いた Arkamani 1世 (Beg.S.6) に関連するものとされていたが、2016 年と 2017 年にドイツ考古学研究所 (Deutsche Archäologische Institut) が墓の再調査を行った結果、紀元前5世紀末から4世紀のナパタ期末の墓と年代付けられ、メロエで最初に築かれた王族のピラミッドであるとされた¹⁰。

ナパタ期③④の中に1基だけナパタ期からメロエ期へ移行する年代とされた墓 (Beg.S.26) がある。この墓に限らず、ほとんどの場合、墓は盗掘を受け、遺体が身に着けていた装身具や、一緒に埋葬された副葬品の多くが盗まれ、墓自体もかなりの破壊を受けている。そのため墓の年代決定に

役立つ有力な遺物が見つからないことも多い。この墓の年代について発掘報告書では、この墓の周りにある墓より明らかに新しいが、墓の年代を示すものは無いとされている。この墓に関しては、墓の造営場所や軸線から考えると、ナパタ期に年代付けられるのではないかとと思われる。

メロエ初期に年代付けられた9つの墓については、西側に1つだけ離れている墓(Beg.S.100)と南側に位置する2つの王妃の墓(Beg.S.9, Beg.S.10)は、現在、南墓地で見ることができる王族のピラミッド群(Beg.S.1～6)の軸線と明らかに異なる。墓の軸線は年代や集団で共有されることも多く、同じ埋葬観念を持っていたと考えることができる。そういった点を考えると、これら3つのグループは異なる年代、もしくは異なる集団に属する可能性が考えられる。

3、墓の型式

前回紹介した北墓地や、今回の南墓地など、現在スーダンで見ることができるピラミッドは、クシュ王ピアンキが自らの墓にピラミッドを導入したことに始まると考えられている。ピアンキの墓はナパタ地域のクッルにあるが、このピアンキ以降、王や王妃の墓の上部構造にピラミッドが築かれ、それが王族に限らずエリート層にまで広がり、メロエ末期まで続くこととなる。また、ピアンキの前王とされるカシュタ(Kashta)という人物の墓では、矩形の土坑墓の上にマスタバのような砂岩製の上部構造が築かれたと考えられているが、ピアンキの墓では下降階段を伴った岩窟墓に変わっている。下降階段で埋葬室にアクセスするようになったのも、ピアンキの時期からと考えられている。では、このピアンキの時期に造営が始まったメロエ南墓地では、どのような墓の型式が見られ、500年ほどの造営期間を通してどのような変化が見られるであろうか。

地図色分け	墓の年代	土坑墓 (上部構造なし)	土坑墓 (上部構造あり)	岩窟墓 (上部構造なし)	岩窟墓 (上部構造あり)
赤色	ナパタ期①：紀元前753～655年	63	8	0	0
青色	ナパタ期②：紀元前7世紀後半	31	0	0	0
緑色	ナパタ期③：紀元前7世紀末～575年頃	25	18	0	2
ピンク	ナパタ期④：紀元前6世紀前半～5世紀中頃	0	2	5	19
オレンジ	ナパタ期⑤：紀元前5世紀後半～330年頃	0	0	2	31
紫色	移行期：紀元前330～275年頃	0	0	0	1
黄色	メロエ初期：紀元前275年頃	0	0	0	9
	合計	119	28	7	62

表2 南墓地の年代別の墓型式と数

南墓地の墓は全体の 68%にあたる 147 基が土坑墓である。単純な土坑墓だけでなく、マスタバもしくはピラミッドなど上部構造の痕跡が確認されている土坑墓も 28 基報告されている。南墓地で上部構造の痕跡が確認できる墓は全体で 90 基となっているが、そのうちの 62 基が階段を有する岩窟墓(rock-cut tomb)である。南墓地ではメロエ初期の王や王妃の墓など、一部の墓では現在も

ピラミッドを見ることができる。しかし、多くの場合、上部構造はかなり破壊を受けており、「階段状のマスタバあるいはピラミッド」など、どのような形であったのかははっきり分からないことも多い。南遺跡では 17 基が「ピラミッド」と報告されている。

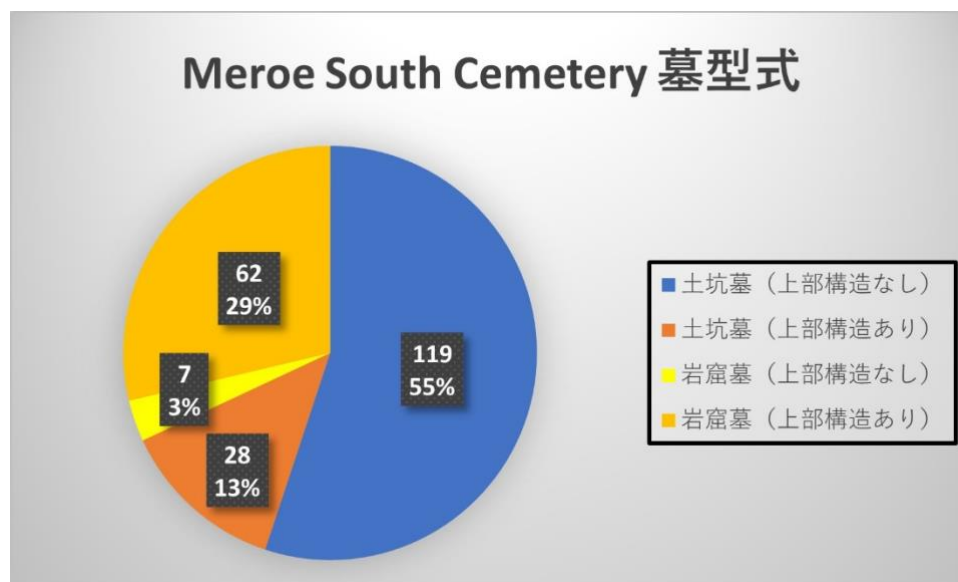


表3 南墓地の墓型式ごとの数と割合

南墓地の造営初期にあたるナパタ期①に属する墓¹¹は 71 基確認されているが、全て土坑墓である。マスタバなど上部構造の痕跡がある墓も8基あるが、ほとんどが単純な土坑墓となっている。ナパタ期②は上部構造を持たない土坑墓のみとなっているが、ナパタ期③では単純な土坑墓も多いが、上部構造を持つ土坑墓が 18 基、そして上部構造と階段を有する岩窟墓が2基見られる。さらにナパタ期④と⑤では、ほぼ土坑墓が見られなくなり、岩窟墓が主流となる。ナパタ期④の上部構造を持つ土坑墓2基(Beg.S.311, Beg.S.500)については、造営場所が同時期の他の墓と違うことから、この時期よりも前の年代の可能性がある。移行期とメロエ初期の墓は、上部構造はピラミッドであり、全て岩窟墓となっている。

南墓地の墓型式を年代ごとに見てみると、クシュ王ピアンキの時期にヌビアに導入されたピラミッドと岩窟墓という組み合わせは、上部構造はピラミッドではない可能性もあるが、南墓地では早くともナパタ期③の時期から、本格的にはナパタ期④の時期から主流となるといえるだろう。

4、ベッド埋葬

ヌビアでは伝統的な埋葬方法として、ベッドの上に屈葬の遺体を置く「ベッド埋葬(Bed Burial)」と呼ばれる埋葬形式があり、古くは A グループ文化(A-group, 3800-2900 BCE)の墓地 Khor Bahan¹²で見つかっている。このベッド埋葬はクシュ王ピアンキの時期も使われていたが、ピアンキはベッド埋葬とエジプトの棺埋葬を組み合わせた新しい埋葬方法を作り出し、自らの墓に取り入れ

たとえられる。この新しい埋葬方法は、埋葬室の床に複数の石を組み合わせたコフィンベンチと呼ばれる土台となる石を置き、その上にベッドを取り付け、さらにそのベッドの上にエジプト様式の棺を置く、というものである。また遺体をミイラにするなども行われ、ピアンキの時期からクシュ王や王妃の墓でこのような新しい埋葬様式が見られるようになった。

ケルマ期(Kerma, 2500-1500 BCE)など古い時期にはベッド埋葬が主流だったこともあり、ベッドそのものが多く出土しているが、ピアンキ以降の墓からはベッドそのものが完全な形で出土する例はなく、ベッドの木片やベッドを支える青銅製の脚などが出土する場合と、埋葬室の床にコフィンベンチが発見されることで、ベッド埋葬の痕跡を知ることができる。ただし、これは王や王妃など王族の墓で見られるものであり、エリート層の墓では埋葬室の床面にベッドの脚に使用したと考えられる4か所の穴や窪みが見られる場合、ベッド埋葬の痕跡と考えられている。そのため、遺体やベッドそのものがない場合でも、ベッド埋葬の痕跡を確認することができる。ピアンキの時期から墓地の利用が始まったメロエ南墓地では 16 基の墓でベッド埋葬の痕跡が見られるが、全て第 25 王朝の時期にあたるメロエ期①に年代付けられる墓であった。

おわりに

本来であれば埋葬された人物や副葬品についてなど、もっと色々なことを合わせて伝えなければこの遺跡の本当の魅力が伝わらないと思うが、勉強不足でちゃんと情報をまとめることができないことをお詫びする。今回、遺跡の魅力は目の前に見える美しいピラミッドだけではない、ということを少しでもお伝えできたのではないかと思う。次回はきちんと情報をまとめ、遺跡の魅力をもっと皆さんに伝えられるようにしたいと思う。最後にメロエ南遺跡で撮った写真をいくつか掲載する。ぜひ機会があれば実際に訪れて欲しい。

Meroë South Cemetery



Meroë South Cemetery : Pyramids



Meroë South Cemetery Beg.S 5



参考文献

- Dunham, Dows. 1950. *El-Kurru*, (The Royal Cemeteries of Kush. Vol.1), Boston, Harvard University Press.
- Dunham, Dows. 1957. *Royal Tombs at Meroë and Barkal*, (The Royal Cemeteries of Kush. Vol.4), Boston, Museum of Fine Arts.
- Dunham, Dows. 1963. *The West and South Cemeteries at Meroë*, (The Royal Cemeteries of Kush. Vol.5), Boston, Museum of Fine Arts.
- Edwards, David N. 2004. *The Nubian Past: An Archaeology of the Sudan*, Routledge, London and New York.
- Emberling, Geoff and Bruce B. Williams (eds.), 2002. *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York.
- Fisher, Marjorie M. (ed.) 2012. *Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University Press, Cairo.
- Killen, Geoffrey (ed.). 2017. "Chapter 3. Bedframes", in *Ancient Egyptian Furniture: 4000 - 1300 B.C.*, Vol. 1, Oxbow Books, Oxford / Philadelphia, 33-57a.
- Török, László. 2002. *The Image of the Ordered World in Ancient Nubian Art: The Construction of the Kushite Mind, 800 BC-300 AD*, Brill, Liden, Boston and Köln.
- Wolf, Pawel and Ulrike Nowotnick, "Chapter 27: The Meroitic Heartland", in Emberling & Williams (eds.), 2020, 511-544.

Wolf, Pawel. (2019). “Meroe, Sudan. Fieldwork at the Royal Cemeteries of Meroe – A Progress report of the Qatari Mission for the Pyramids of Sudan. The years 2017 and 2018”, *Faszikel 1*, 189-196.
<https://publications.dainst.org/journals/index.php/efb/article/view/2196/6616> (accessed July 18, 2021)
Yellin, Janice. W. 2020. “Chapter 29: The Royal and Elite Cemeteries at Meroe”, in Emberling & Williams (eds.), 563-588.

¹ 西墓地は他の2つの遺跡と異なり、王墓地ではなく、王族やエリート層の墓地と考えられる。

² メロエの3つの墓地の発掘調査は、1920年の第5次調査の終わりから1923年の第8次調査まで実施された。

³ Vol.1:El-Kurru (1950)、Vol.2:Nuri (1955)、Vol.3:The Decorated Chapels of the Meroitic Pyramids at Meroe and Barkal (1952)、Vol.4: Royal Tombs at Meroe and Barkal (1957)、Vol.5: The West and South Cemeteries at Meroe (1963)。これらの報告書を筆者は大学図書館等で入手したが、現在はインターネットで入手できるようである。

⁴ アメン神はエジプトの国家神であり、エジプトでは人間の姿で表されるが、このジェベル・バルカルのアメン神は湾曲した角を持った羊頭の人間の姿で表される。ヌビアでは古くから羊が犠牲獣として墓から見つかることが多く、また頭部に羽飾りをつけた羊が含まれることがあることから、ヌビア地域では羊が重要な意味を持っていたと考えられる。ただし、羊頭のアメン神に関しては、エジプトの新王国時代のトメス1世がナイル川第5急湍のクルグスに残した岩絵がヌビアで最初に見つかったものと考えられている。またジェベル・バルカル麓のアメン神殿(B500)から見つかったトメス3世の碑文にも、この羊頭のアメン神が描かれていた(Török 2002, p.48)。

⁵ スーダンの首都ハルツームより南東に250kmのJebel Moya遺跡で、第25王朝の王(シャバカ Shabaqa)やピアンキの名前が入った品物が発見されたという(Wolf and Nowotnick 2020, p.516)。

⁶ 長方形の墓がベンチに似ていることから、アラビア語でベンチを意味する「マスタバ」と呼ぶようになった。古代エジプトでは初期王朝時代など古くから知られる墓の形式である。メロエの「マスタバ」に関しては上部構造の損傷が激しく、残っている基礎部分の石材やレンガだけでは「マスタバ」なのか「ピラミッド」なのか判別しにくいのが実情である。

⁷ 登録番号はS1～S503まで使われているが、半分以上の番号は「Numbers not used」と報告書に記載され、使われていない。しかし、1つの番号に枝番を複数つけて使用している場合もある。

⁸ 年代に関してはMarjorie M. Fisher (eds.) 2012, *Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University in Cairo Press, Cairo.を参照した。

⁹ Dunham 1957, p.37. この報告書ではKennuwaはAmanislo(Beg.S.5)の妃となっている。この当時はArkamani 1世よりAmanisloのほうが年代が古いと考えられていたようである。ヌビアの王名や治世年に関しては、文字資料が少ないこともあり、明らかになっていないことが多い。

¹⁰ Wolf 2019.

¹¹ 発掘報告書では、墓の年代を決定できる遺物が少ない場合、造営年代の幅が長く設定されている。南墓地では年代幅はそれほど大きくないが、同時期に造営が開始された西墓地では100年から300年ほどの年代幅が設定されている場合が多々ある。

¹² 1909年にライスナーが発掘した遺跡で、現在はナセル湖の下に沈んでいる。ここで見つかった木製のベッドのようなものが、その後、王朝時代のエジプトで頻繁に利用されるベッドの原型ではないかと言われている(Killen 2017, pp.33-34)。